

病理診断科

- 1) 組織診6,604件（前年比99%、うち予防検診センターなど710件）、迅速診断376件（前年比85%）、細胞診3,782件（前年比107%）、迅速細胞診96件（前年比128%）、病理解剖19件（前年比127%）であった。常勤病理医2名（うち病理専門医2名、細胞診専門医2名、分子病理専門医2名）、非常勤病理医3名、臨床検査技師7名（うち認定病理検査技師1名、細胞検査士4名）、病理検査事務員1名で対応した。
- 2) 組織診のうち診断が困難であった3症例（皮膚1例、肺1例、縦隔1例）については専門病理医にコンサルトし、正しい病理組織診断のもとで適切な治療が行われるように努めた。
- 3) 病理診断において診断確定および治療方針決定のために免疫染色の重要性が高くなっている。当科では1年間に1,981症例（全症例の30%、前年比96%）で免疫染色を施行した。
- 4) 症例検討会はCPC 8回（全8症例）、消化管生検検討会10回、腎生検検討会10回を開催した。また、静岡県立がんセンター主催のエキスパートパネル17回に参加した。
- 5) 初期研修医（2年目）4名がそれぞれ1か月間の病理研修を行った。
- 6) 専門学校生、高校生、中学生の実習・職場見学を受け入れた。
- 7) 2007年から使用していたバーチャルスライドシステム（NanoZoomer Digital Pathology）の保守契約期間が終了したため、新システム（ベンタナDP600）へ更新した。引き続き悪性腫瘍症例の保存、借用標本の保存、電子カルテからの参照、院外コンサルテーションの補助、症例検討会、臨床医向けのサービス等に活用している。
- 8) 医療事故防止、日常業務の振り返り等に活用するため、病理検査業務用の動画記録カメラシステム（常光）を導入した。
- 9) 2002年から病理肉眼標本のデジタル撮影を開始し、22年となった。多くは高品質のデータ

（RAW）として保存され、電子カルテでの参照、学会発表、論文作成に活用されている。

- 10) 日本病理精度保証機構の2024年度外部精度評価（染色サーベイ、フォトサーベイ）に参加し、所定の基準を満たしたことを認定された。
- 11) 2025年度も精度管理の充実に努め、正確な病理診断で患者さんに応えたい。
（部長 高橋 青志郎）

・医師数 2名 ・後期研修医 0名
・初期研修医 0名

（2025年4月現在）